

フランス語教科書への地域変種の反映とその課題

近藤 野里
青山学院大学

ふらんぼー(Flambeau) vol.49 2023, p. 61-76.
原稿受理 2023-11-27 ; 最終版 2024-02-01

抄録

本稿の目的は、様々な地域で出版されたフランス語教科書における地域変種の扱いについて、先行研究を読み解くことで、フランス語教科書に地域変種を導入する際の具体的な課題を抽出する。最近フランスで出版された発音教本を分析することで、地域変種がどのように扱われているのかを明らかにし、今後の展望を考察する。

Summary (Résumé)

L'objectif de notre article est de montrer les questions spécifiques à l'introduction de différentes variétés de la langue française dans les manuels de FLE en nous basant sur des études antérieures. En analysant les manuels de prononciation récemment publiés en France, nous identifierons la manière dont les variétés sont traitées et nous discuterons des perspectives d'avenir.

キーワード (教科書、地域変種、フランス語圏、語彙、発音)

© ふらんぼー Flambeau 49 (2023) pp. 61-76.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室
183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1
Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



1. はじめに

フランス語教育において言語変異をどのように扱うのかという問題はこれまでも議論されてきたことである¹(cf. Valdman, 2000 ; Detey, 2017)。その背景には社会言語学やコーパス言語学の発展によってフランス語がいかに多様であるかが具体的に明らかにされていったこと²、そして言語教育の方法論がコミュニケーション志向に変化していったことなどが考えられる。また、フランス語圏の国・地域が多く参加し、政治・経済分野や教育分野での協力を目標とするフランコフォニー国際機関の活動の活発化とともに、フランス語教育に関わる教師や学習者の関心もフランス語圏の様々な文化や社会に向くようになったといえる。Detey (2017)は教材の中での口語的なフランス語の変異の不在³に言及しているが、フランス語学習者がフランス語の様々な言語変異に触れる機会を増やす試みが行われていないわけでは決してない。フランス語圏の文化・社会的トピックがフランス語教科書で扱われるという傾向は、ヨーロッパで出版される教科書に特に顕著に観察されるだろう。しかし、外国語としてのフランス語(Français Langue Étrangère, FLE)の教材の中で、フランス語の多様性を扱うことはまだまだ発展の途上にあると言えよう。

本稿の目的は、様々な地域で出版されたフランス語教科書における地域変種の扱いについて、先行研究を読み解くことによって、そして筆者自身による教科書分析によって、その方法にどのような課題があるかを提示することである。スイスのフランス語教科書を分析した Lafine & Thomas (2020)、フランスとカナダのケベック州で出版された教科書の分析を行った Duchemin (2017)、ドイツで出版されたフランス語教科書の分析を行った Chalier (2021)による先行研究を基に、教科書に地域変種を反映するための課題を抽出したい。また、本稿では発音教本における発音の多様性の扱い方にも着目し、最近フランスで出版された発音教本を分析することで、地域変種がどのように扱われているのかを明らかにする。

2. 研究背景

20 世紀以降に出版されたヨーロッパ共通参照枠(CECR)では「社会言語学的能力」の習得もその目標の一つに掲げられ、以下に挙げる引用のように、様々な社会的側面と言語を使用するための知識や技能の習得が目指されている。

« La compétence sociolinguistique porte sur la connaissance et les habiletés

¹ 本研究は、科研費 22K13180 若手研究「フランス語教科書への地域変種の反映の試み」の助成を受けた。

² 最近ではフランス語が複数の規範を持つこと(Pluralité de normes)が、母語話者によって認識されるようになってきている(Chalier, 2021)。

³ Detey (2017)はこのような不在は 3 つの先入観に基づいたものであると主張している。(1)「真の／良き」フランス語はたった一つしかない。それは標準フランス語である、(2) 変異の問題に言及する以前に、学習者はまず標準フランス語を習得するべきである、(3)標準フランス語を習得するのはすでに難しいため、変異を教えることができない(または、変異の教え方を知らない)。

exigées pour faire fonctionner la langue dans sa dimension sociale [...] : marqueurs des relations sociales [...], règles de politesse [...], expressions de la sagesse populaire [...], différences de registre [...], dialecte et accent [...]. » (CECR, 2001 : 93)

「社会言語学的能力とは、社会的な次元において言語を使用するために必要な知識や技能に関するもので、社会的な関係の標識[...]、礼儀の規則[...]、一般常識の表現[...]、レジスターの違い[...]、方言やアクセント[...]などである。」

変異に関わる能力が望まれるのは、特に B2 レベルからであるため(CECR, 2001 : 95)、それ以外のレベルの学習者にそのような能力の習得が必要とされているわけではない。ただし、このような能力を学習者が身に付けるのは実際には簡単なことではない。特に留学経験がなく、教室でフランス語を学ぶ学習者にとってはなおのことである。そのような言語変異を反映することによって、話される地域によっても、また使用されるレジスターによっても、フランス語がいかにも多様であることを学習者に紹介することは、教科書の役割の一つであろう。近年では言語変異を教科書や教材に取り入れる試みは見られるものの⁴、まだまだ課題が多いのが現状である。例えば、スタイルに関わる変異は既に教科書に取り入れられている場合もあるが、実際に話されたフランス語と比較すると頻度が少ないことやオーセンティックな発話からはかけ離れている場合も多いことが指摘されている(cf. Surcouf & Giroud, 2016; Kondo, 2021)。また、

日本の現状についても、ここで言及しておきたい。近藤(2023 : 125)は日本で出版されたある教科書では、二人称単数主語人称代名詞 *tu* の縮約、否定辞 *ne* の脱落、無音の *e* (*e caduc*) の脱落、代名詞 *on* の多用、非人称 *il* の /l/ の脱落などが、巻末資料に取り上げられていることを指摘しているが、日本の教科書で言語変異が扱われることは非常に珍しい。他方で、文化的側面に注目して様々なフランス語圏の地域の文化が扱われる教科書もまた珍しいが、そのような試みの一例として、小松&デルメール(2009)による『フランコフォニーへの旅』がある。小松&デルメール(2009)は主にフランス語圏地域の文化や言語状況を扱っているものの⁵、各地域のフランス語の言語学的特徴などを取り上げてはいない。また、アヌカン他(2018)が作成した『パラレル 2』ではフランスの地方都市の文化やベルギー、スイス、ケベックの文化が扱われるが、言語学的特徴が取り上げられることはほとんどない⁶。筆者が知る限りではあるが、地域変種の言語学的特徴を取り

⁴ そのような試みによって参照されるべき文献の一つとして、例えば発音の多様性に関する文献 Detey et al.(2016). *La prononciation du français dans le monde*. Paris : CLÉ International が挙げられる。

⁵ 小松 & デルメール(2009)の巻末資料「フランコフォニー解説」では、フランス、ヨーロッパ、北米、カリブ海地域、マグレブ、サハラ以南アフリカ、東南アジア、太平洋のフランス語地域におけるフランス語の言語状況についての解説がある。

⁶ 『パラレル 2』の会話文の中で、ケベック・フランス語でスノーモービルを表す *skidoo* という語彙が観察される(« Qu'est-ce que c'est le skidoo ? C'est un scooter des neiges comme on dit en France »(p.48))。ただし、*skidoo* という語彙はケベック・フランス語オンライン辞書 Usito (<https://usito.usherbrooke.ca/>)によれば批判されたアングリシズムの語彙であって、標準ケベック・フランス語では *motoneige* という語彙が使用されるようである。また、このような語彙に関する説明は教科書

上げているフランス語教科書は日本では未だ出版されていない⁷。

3. 教科書に反映されるフランス語の地域変種

本節では、フランス語の地域変種を教科書に反映するための課題を、先行研究を基に考えたい。フランス語教科書は様々な地域、また様々な学習者を対象に作成され、出版されている。まず、フランス語を国語もしくは公用語に持つ国・地域の教科書の地域変種に着目した研究には、フランスとカナダのケベック州で出版された教科書を分析した Duchemin (2017)、またスイスの教科書について扱った Lafine & Thomas (2020)がある。フランス語圏以外の国で出版された教科書での地域変種の反映方法に着目した研究には Chalier (2021)がある。

3.1. フランスで出版された教科書

Duchemin (2017)はフランスで出版された教科書とケベック州で出版された FLE および FLS (Français Langue Seconde)の教科書の分析を行っているが、本節ではフランスで出版された教科書の分析についてのみ扱う。Duchemin (2017)の研究では、フランスで出版された 15・16 歳以上の学習者向けの A2/B1 レベルの教科書 5 冊が分析対象となっている。Duchemin (2017)が分析対象としたフランスの教科書では地域変種に対する注目度は低い、その地域変種の中でもケベック・フランス語が最も頻繁に扱われていることを確認されている。また、とりわけ発音や語彙、また社会的に有標なケベック・フランス語の社会変種の一つであるジュアル⁸が紹介されている。

Duchemin (2017: 57)が分析対象とした教科書の一つである *Reflets 2*⁹ (p. 75)には以下のようなケベック・フランス語の語彙のリストが観察される。

Le français parlé par la majorité des Québécois présente des différences avec le français de France. Voici quelques variantes lexicales (「ケベックの人々の多くが話すフランス語は、フランスのフランス語とは異なる。以下は、いくつかの語彙の違いである。」):

Accommoder : rendre service à.

Bonjour : au revoir.

には見られない。

⁷ 教科書ではないが、東京外国語大学フランス語モジュール

(<https://www.coelang.tufts.ac.jp/mt/fr/>) では、ケベック、スイス、南仏のフランス語変種を学ぶことが可能である。

⁸ ジュアル(joual)とは、20 世紀半ばにモントリオールの労働者階級の居住区で話された口語を指す。労働者階級の話者が *cheval* をジュアルと発音したことがその語源である。ジュアルは 1960 年代から 1970 年代にかけて、ケベックの人々の関心の的になり、多くの書籍や新聞記事で取り上げられた (Reinke & Ostiguy, 2016 :70-71)。

⁹ Capelle, G. & Gidon, N. (2002). *Reflets 2 : méthode de français*, Paris : Hachette.

<i>Une camisole</i> : un T-shirt.
<i>Une canne</i> [sic] ¹⁰ : une boîte de conserve.
<i>Un char</i> : une voiture.
<i>Chauffer</i> : conduire.
<i>Le déjeuner</i> : le petit déjeuner.
<i>Dîner</i> : déjeuner.
<i>Une fève</i> : un haricot sec.
<i>Lumière</i> : feux de circulation.
<i>Magasiner</i> : faire les courses.
<i>Faire du pouce</i> : faire de l'autostop.

図1:教科書 *Reflets 2* (p. 75)に見られる
ケベック・フランス語の語彙リスト(Duchemin, 2017 :57)

Duchemin (2017:57)はこのリストに、社会言語学的な情報が付加されておらず、その語が使用される文脈が説明されていないという問題点を指摘している。確かに、上記の語彙リストに含まれるものはアングリシズムの語彙(*accommoder, canne, char, lumière*)、標準的な語彙(*magasiner, bonjour, camisole, déjeuner, dîner*)、非標準的な語彙(*chauffer, faire du pouce*)が平面的に示されているにすぎない。また、Duchemin (2017:57)は語彙の定義が必ずしも正確ではないことを主張している。例えば、*camisole* は袖がない衣服であるため、対応する語を与えるなら *marcel* であると述べている。

ベルギー、スイス、アフリカの地域変種に関わる情報量は少ないようである。ベルギーのフランス語についてはベルジジズム(*nonante, sacoché, carte-vue, bacs à ordures*)が紹介されており、スイスのフランス語については数詞 *septante* に触れられている。アフリカに関しては、いくつかのフランス語変種を聞かせるような練習問題もあるようだが、アフリカ大陸全体で均質的なフランス語が話されるという印象を与えてしまうような提示方法がとられる場合もあると Duchemin (2017)は述べている。フランスのフランス語の変異については、フランス国内の地域変種よりも「逆さことば」(*verlan*)に代表されるような若者言葉が多く扱われているようである。「訛り」(*accent*)については、教科書の一つ(*Connexions 3*¹¹)では、フランスの地域変種(マルセイユ、アヴェロン、コルシカ、アルザス)について触れられているが、特に北仏と南仏のフランス語の違いを強調するものである。

3.2. 国内にフランス語圏を有する国で出版された教科書

3.2.1. スイスのドイツ語圏で出版された教科書

Lafine & Thomas (2020) はスイスのドイツ語圏の義務教育課程(小学校および中学校)で使用される4つの教科書シリーズを分析対象としている。これらの教科書シリーズ

¹⁰ 「缶詰」を意味する *canne* の綴り字の間違いである。

¹¹ Mérieux, R., Loiseau, Y. & Bouvier, B. (2005). *Connexions : méthode de français (niveau 3)*. Paris : Didier.

では、フランス以外のフランス語圏が登場することはあまりないようであるが、教科書シリーズの中の一つ *Clin d'œil*¹²では、ケベック州、フランス南部、セネガル、ジュネーブのフランス語変種を扱った練習問題も見られるようである。この教科書シリーズの教師用指導書には「基本的に、フランス語圏スイスの人々はフランス人よりもゆっくと話す。」という説明が書かれていることを Lafine & Thomas (2020 : 41)は指摘している。ただし、スイスのフランス語変種に関する発音特徴が言語学的に解説されているわけではないようである。

教科書で使用されるフランス語は基本的にはフランスのフランス語の規範に従うようであるが、スイスのフランス語圏特有の語彙もいくらかは紹介されている。Lafine & Thomas (2020) はスイス・フランス語に特徴的な数詞 *septante* (70), *huitante* (80), *nonante* (90)、食事に関する語彙、携帯電話を意味する語彙 *Natel* がどのように教科書に反映されているのかを確認している。

まず、数詞については3つの教科書シリーズで *septante*, *nonante* の使用が確認されるものの、*soixante-dix*, *quatre-vingt-dix* が選択されている教科書シリーズもある。スイスの変異を使用しない理由として、フランス語圏のどこでもフランス語を理解してもらうために、フランスで使用されている数詞を意図的に使っていることが教師用指導書で説明されている (Lafine & Thomas, 2020 : 38)。スイスのフランス語圏全体で使用されているわけではない *huitante*¹³は、教科書にはそれほど積極的に反映されないようである。教科書シリーズの中には、この数詞にアステリスクを付加し、「ヴォー州では、80 を *huitante* と言う。この呼び方をフリブール州とヴァレー州でも聞くことができる」という説明書きで紹介する場合や、「スイスのフランス語圏とベルギーでは、70 は *septante*、80 は *huitante*、90 は *nonante* と言う」という大雑把な説明¹⁴で済ませる場合があることを、Lafine & Thomas (2020 : 37-38)は確認している。

食事に関する語彙については、教科書シリーズ *Envol*¹⁵でのみ確認されるようだ。ただし、*petit déjeuner*, *déjeuner*, *goûter*, *dîner* という語彙にアステリスクが付けられ、「スイスのフランス語圏では、*le déjeuner*, *le dîner*, *les quatre-heures*, *le souper* が使用される」という説明がある。また、同様の教科書シリーズには *dîner* という語彙の意味の地域差から生じる勘違いがテーマの会話文も観察される(Lafine & Thomas, 2020 : 39)。

携帯電話を意味する *Natel* については、4つの教科書シリーズの中でも1度しか使用が確認されず、それ以外では常に *portable* や *téléphone* という語彙が使用されることを Lafine & Thomas (2020 : 39)は確認している。また、このほかにも教科書ではスイスの代表的な食べ物の名称 (*fondue*, *raclette (au fromage)*, *coupe Danmark*)などが少なからず見られるものの、特にそれらがスイス・フランス語に特有な語彙であることは明示的に説明されないようである。

¹² Grossenbacher, B., Sauer, E., Ganguillet, S., Lovey, G., Sauer, E., Thommen, A., Cavelti, S. & Vicelli, F. (2016). *Clin d'œil* 8. Berne : Schulverlag Plus.

¹³ Lafine & Thomas (2020)によれば、*huitante* はヴォー州、フリブール州、ヴァレー州で最もよく使用される。

¹⁴ ベルギーでは *huitante* は使用されない。

¹⁵ Achermann, B., Bawidamann, M., Tchang-George, M. & Weinmann, H. (2000 / 2001). *Envol* 5 & 6. *Französischlehrmittel für die Primarschule*. Zurich: Lehrmittelverlag des Kantons Zürich.

Lafine & Thomas (2020)による教科書分析からは、スイス・フランス語に特有な語彙が使用されるものの、どちらかといえばフランスのフランス語の語彙の習得を優先する姿勢が明らかになったといえる。

3.2.2. カナダのケベック州で出版された教科書

Duchemin (2017)はカナダのケベック州の中等教育(15歳・16歳)もしくはセジェップ(ケベック州特有の大学基礎教養機関)で使用されるA2/B1レベルの教科書5冊を分析している。Duchemin (2017)によれば、教科書ではフランスとケベック州以外のフランス語圏の変種については言及がないようだ。また、フランスのフランス語の地域変種や社会変種について触れられることはほとんどなく、フランスに関して取り上げられる場合には、フランスの作家の詩、演劇、小説など様々なジャンルの文学的テキストが提示されるようである。変異について扱われる場合は、語彙レベルであって、他の言語特徴については扱われないようである。練習問題でケベックのフランス語変種が扱われる場合には、ケベック・フランス語に特有な語彙がどのレジスターと結びつけられるかを問うもので、特にインフォーマルな発話で使用される語彙が提示され、それに対応する標準フランス語の語彙をたずねるタイプの練習問題が多いことが指摘されている。

3.3. 非フランス語圏の国で出版された教科書

本節ではChalier (2021)による教科書分析を紹介する。Chalier (2021)はドイツで出版された中学生用の2つのフランス語教科書シリーズを分析した。これら2つの教科書シリーズはA1からB1レベルのものである。教科書ではフランス語圏の文化について幅広く扱われているものの、言語に関わる要素は言語人口統計学的なものを除けば少数にとどまるようである。言語特徴に関わる要素として教科書で提示されるのは発音と語彙で、特にケベック・フランス語に関するものが多いことが確認されている。教科書の練習問題では読解(*compréhension écrite*)とリスニング(*compréhension orale*)がある。読解の一例として、ケベック・フランス語の語彙をフランスのフランス語に置き換えるような練習問題があり、それを再現したものが以下の図2である。

<i>La famille Marin trouve que le français québécois est très « fun ». Retrouvez les expressions françaises qui correspondent aux expressions québécoises [...].</i>	
Français standard	Français québécois
la salle de bain	la chambre de bain*
la voiture	le char*
mignon*	cute*
nettoyer	cleaner*
faire les courses	magasiner*

le hot-dog	le chien chaud*
le repas	le lunch*
voyager	triper*
la boîte aux lettres*	la boîte à mail*
se balader	prendre une marche*
tomber amoureux*	tomber en amour*

図 2: 読解問題の中で、ケベック・フランス語の語彙をフランスの語彙に置き換える練習を再現したもの¹⁶(Chalier, 2021 : 382)

図 2 のケベック・フランス語として提示される語彙にはすべてアスタリスクがついており、これらの語彙が選択的(*facultatif*)なもの、つまり標準的ではないものであると解釈される。このような練習問題は、学習者にケベック・フランス語が非標準的なもの、もしくはスティグマがあるものであるという誤解を与えてしまう可能性があることを Chalier (2021)は指摘している。確かに、図 2 に見られる語彙の中には、標準的なものに分類される語彙(*la chambre de bain, magasiner, le chien chaud, le lunch*¹⁷, *tomber en amour*¹⁸)もあれば、口語的な語彙(*triper*)、そしてアングリシズム(*le char, cute, cleaner, la boîte à mail, prendre une marche*)も見られる。特に、標準ケベック・フランス語で使用される語彙にアスタリスクを付けてしまうことで、ケベック・フランス語がフランスのフランス語に対して非標準的であるという大きな誤解を与える可能性がある。そして、ケベック州で話されるフランス語にも独自の規範があるということが理解されない可能性がある。

リスニングの練習問題というのは、録音を聞いて内容を理解するというタスクが与えられるのがよくあるパターンだろう。リスニングの練習問題が変種を扱っている場合に、リスニングで使用される音声の話者の「訛り」は内容理解を妨げる障害として捉えられてしまう可能性があり、また基本的にはその発音の特徴に関する解説が与えられないことを Chalier (2021)は指摘している。

3.4. まとめ

以上の先行研究による教科書分析からは、まず教科書がどの国・地域で出版されるかによって、フランス語の様々な地域変種を扱うかどうかという選択が行われている可能性が示唆された。フランスとドイツで出版された FLE の教科書では、フランス語の様々な地域変種はばらつきがありつつも扱われているようである。また、フランスで出版された教科書の中には、フランス国内の地域変種や社会変種を扱うものもあることが確認された。一

¹⁶ Chalier (2021)は Bächle, Hans *et al.* (2012). *À plus! 2. Méthode intensive*. Berlin: Cornelsen. p. 78.を参照している。

¹⁷ *lunch* は職場や学校に持っている食事のことであるため、それに対応するフランスのフランス語として提示されている *repas* は必ずしも正確であるとは言えない。

¹⁸ *tomber en amour* はケベック・フランス語オンライン辞書 Usito では口語的語彙に分類されていないものの、「*être en amour, tomber en amour* の使用は、*être amoureux, tomber amoureux* の非標準的な同義語として批判されることがある。」との説明がある。

方で、スイスやケベック州では異なる傾向が指摘されている。スイスの場合は、教科書によってはスイス以外の地域変種を扱う教科書もあるようだが、基本的にはフランスのフランス語規範に基礎を置きつつ、語彙に関してはスイスで使用される語彙も反映される。ただし、スイスの場合も州によって数詞などの語彙の使用にばらつきがあるため、数詞 *huitante* の教科書への反映は積極的に行われていない。ケベック州で出版された教科書では、ケベック州およびフランス以外のフランス語圏の変種が扱われていないことが Duchemin (2017) の研究で明示されていた。

地域変種の中でも積極的に教科書へ導入されているのはケベック・フランス語のようだが、常にフランスのフランス語を基準にした比較によって、その隔たりに着目されることが Duchemin (2017) および Chalier (2021) によって指摘されている。特に、語彙的な違いが教科書で扱われるが、社会言語学的情報が付加されないことによって、標準的な語彙と非標準的な語彙が一様に扱われ、ケベック・フランス語にはあたかもインフォーマルなだけな話し方しか存在しないような印象を与えかねないことが指摘されている。

また、地域変種が教科書で扱われる場合には、特に語彙の違いへの注目度が高く、発音への注目度はそれほどではないようだ。確かに、発音を扱う場合には音声資料などを収集する必要があり、教科書作成に必要な予算が高くなる可能性があるが、語彙はそのような問題がないというのもその理由の一つであろう。

4. フランスで出版された発音教本に見られる地域変種の扱い

本節では、フランスで出版された発音教本に見られる地域変種の扱いについての分析を提示する。Didier 社から出版された Kamoun & Ripaud (2017) の発音教本 *Phonétique essentielle du français B1/B2* では、「Les accents régionaux」(pp.144-145) というテーマでフランス国内の地域変種が 2 ページにわたって、また「Les accents francophones」(pp.146-148) というテーマでフランス語圏の変種が 3 ページにわたって扱われている。この教科書では地域変種だけではなく、発話スタイルの違いによる話し言葉の特徴など言語変異に関わる複数のテーマが扱われていることは特筆すべきだろう。また 2 つの章で、以下のような説明が見られる。

« On parle d'accents régionaux par rapport à l'accent dit « standard » parisien, qu'on apprend et qu'on entend majoritairement dans les médias. » (p. 145)

« On parle d'accents francophones par rapport à l'accent dit « standard » parisien, qu'on apprend et qu'on entend majoritairement dans les médias. » (p. 147)

「『地方の訛り』／『フランス語圏の訛り』というのは、私たちが学ぶ、メディアの多くで耳にする標準的なパリのフランス語の訛りに対してである。」(筆者訳)

上記のような説明からわかることは、比較する基準としてパリのフランス語(パリ変種)が選択されているということである。また、パリ変種の「訛り」という表現を使うことで、他の変種と同様にパリ変種も独自の訛りを持っているという認識を Kamoun & Ripaud (2018) が示して

いることは興味深い。当該 2 章の練習問題で使用される音声資料¹⁹には、「Les accents régionaux」には 1 分 7 秒の抜粋（および練習問題用に編集された 34 秒の抜粋）が、そして「Les accents francophones」には 1 分 13 秒の抜粋（および練習問題用に編集された 51 秒の抜粋）が収められている。パリ変種の抜粋は、ニュース番組でアナウンサーが話しているものである。それに対して、パリ変種以外の抜粋はアナウンサーが話しているものではなく、一般のフランス語話者のインタビューを切り取ったものがある。また、音声資料を聞く限りではそれらのフランス語話者の年齢や性別は一定ではなく、またどのような社会言語学的プロフィールを持つ話者なのかといった情報も与えられていない。

4.1. フランス国内の変種

フランス国内の地域変種として扱われているのは、パリ、ブルターニュ、プロヴァンス、オキシタニー、アルザスで話される変種である。ここで紹介される変種の選択理由は特に説明されていない。また発音教本であるため、語彙の多様性についてはもちろん扱われない。音声を聞くことで、それぞれの地域のフランス語の音声的特徴を知覚するタイプの練習問題が提供されている。例えば、Réfléchissez というコーナーでは、それぞれの地域の音声抜粋と、その地域の発音特徴の解説文を結びつけるというアクティビティーが用意されている。以下に、それぞれの地域とその特徴の解説を挙げる。

地域名	特徴
オキシタニー	「r」は巻き舌である。 鼻母音と子音を発音する。 綴り字「e」をほぼ常に発音する。
アルザス	アクセントが末尾の音節に置かれぬ。 母音がより狭く発音される。例えば、[ɔ]は[o]と発音される。
プロヴァンス	鼻母音と子音を発音する。 綴り字「e」をほぼ常に発音する。
ブルターニュ	[a]は後舌で発音される。つまり、円唇音かつ後舌音の[a]で発音される。
パリ	「r」は巻き舌ではない。 綴り字「e」はほとんど発音されない。 アクセントは末尾に置かれる。

図 3: フランス国内の地域変種の特徴
(Kamoun & Ripaud (2017 :146)の解説)

しかし、上記の図の解説が必ずしも適切ではない場合や、解説が不十分である場

¹⁹ Kamoun & Ripaud (2017)は Philippe Boula de Mareuüil (LIMSI-CNRS)によって録音が行われたものであり、許可を得て複製していることを説明している。

合が多くみられる。まずオキシタニーに関して言えば、教科書の音声資料では /r/ は実際には歯茎ふるえ音 [r] (いわゆる「巻き舌」) ではなく歯茎はじき音 [r̥] で発音されている。南フランスでは /r/ がふるえ音の [r] もしくははじき音の [r̥] で発音されるという主張は実際には誇張されたものであり、Phonologie du Français Contemporain の調査²⁰では世代差があることが確認されており、南仏の調査地では 1945 年以降に生まれた話者はみな口蓋垂音を発音したことが報告されている (Coquillon & Durand, 2010 : 188)。

次に、アルザスの音声資料では、確かにアクセントが末尾の音節に置かれられない場合があることが確認されるが、常にそのような発音がされているわけではないようである。また、アルザスのフランス語では [ɔ̃] が [õ] で発音されることや [œ̃] が [ø̃] で発音されることがあるが、これは基本的には /r/ で終わる閉音節の場合に起きることが Reutner (2017) によって指摘されており、教科書の解説が十分でないことは否定できない。

プロヴァンスとオキシタニーの発音特徴の解説の中に、「鼻母音と子音を発音する」とあるが、この説明は不十分なものである。これは、鼻母音が発音される際に、まず口母音、その後に母音が鼻音化され、最後に鼻子音の要素が続くという調音方法 (Coquillon & Durand, 2010 : 193) のことを説明している。

また、ブルターニュの音声資料において [a] は常に後舌母音の [ɑ] で発音されているわけではない。

4.2. フランス語圏の変種

次にフランス語圏の変異として紹介されるのはフランス、ブルキナファソ、モロッコ、スイス、ケベックの変種だが、ここで紹介される変種の選択についても理由は特に説明されていない。フランス国内の地域変種の章と同様に、ここでも語彙の多様性について扱われることはない。音声資料の聞き取りから、どの国・地域で話されるフランス語であるかを当てる練習問題や、音声的特徴を知覚する練習問題が提供されている。この章でも Réfléchissez というコーナーがあり、それぞれの地域の音声抜粋と、その地域の発音特徴の解説文を結びつけるというアクティビティーが用意されている。以下に、それぞれの地域とその特徴の解説を挙げる。

地域名	特徴
ブルキナファソ	« r » は、ドイツ語の « r » のような喉音である。 アクセントは文末から 2 番目の音節に置かれることがある。
モロッコ	« r » は巻き舌である。 [y] は [i] になる。 アクセントは文末から 2 番目の音節に置かれる。
スイス	[i]-[e]-[ɛ] が近接している。

²⁰ Phonologie du Français Contemporain (現代フランス語音韻論) は、大規模な話し言葉のデータベースを構築するプロジェクトであり、1999 年に発足して以来、一定のプロトコルに従い、フランス語圏の様々な地域で 700 を超える録音が実施された。

	[u]-[o]-[ɔ]が近接している。
ケベック	[a]は後舌の [ɑ]で発音される。 [i]と[y]の前で[t]は[ts]に、[d]は[dz]と発音される。 鼻母音[ã]は[ɛ̃]と発音される。
フランス	« r »は巻き舌でも、喉音でもない。 アクセントは末尾に置かれる。

図 4: フランス語圏の地域変種の特徴
(Kamoun & Ripaud (2017 :148)の解説)

教科書では上記の図 4 のように、各変種の音声特徴がリスト化されているものの、その音声特徴が付属の音声資料で観察されないという欠陥がある。また、音声特徴として挙げられている情報自体が間違っている場合も多い。

まず、ブルキナファソのフランス語では「« r »は、ドイツ語の « r »のような喉音である。」とあるが、音声資料ではどちらかという歯茎はじき音[r]で発音されている。また、「アクセントは文末から 2 番目の音節に置かれる」と説明されるが、音声資料を聞いている限りでは、長さによるアクセントではなく、高さアクセントが語末の音節に置かれているように聞こえる。

また、モロッコの/r/は巻き舌で発音されると解説されているが、音声資料では口蓋垂摩擦音[ʁ]が発音されている。また、「[y]は[i]になる。」という説明や「アクセントは文末から 2 番目の音節に置かれうる」という説明に関しては、Embarki *et al.*(2016)によれば、マグレブのフランス語話者にはそのような傾向が確かにあるようだが、音声資料で実際にその発音が聞けるわけではない。

スイスのフランス語については、「[i]-[e]-[ɛ]が近接している。[u]-[o]-[ɔ]が近接している。」という説明があるが、スイスのフランス語ではむしろ半狭・半広母音の中和が起きないことが Andreassen *et al.* (2010 :223)によって指摘されている。つまり、/e/と/ɛ/は対立しており、例えば一人称単数の直説法未来形 *pourrai* と条件法現在形 *pourrais* の発音は区別される。そして、/o/と/ɔ/についても *peau* /po/と *pot* /pɔ/の発音は区別される。そのため、むしろ「[i]-[e]-[ɛ]は明白に区別される。[u]-[o]-[ɔ]も同様である」という説明の方が適切であろう。

ケベックのフランス語の発音については、そもそも/a/と/ɑ/の音韻的な違いが残っているため、/a/が後舌の[ɑ]で発音されることはなく、/ɑ/が[a]で発音される。また、ケベックでは 4 つの鼻母音が保持されているため、鼻母音[ã]は[ɛ̃]と混同されることはない。

4.3. まとめ

Kamoun & Ripaud (2018)の発音教本は、フランス国内およびフランス国外の様々な変種を複数扱い、地域や国によってフランス語の発音も非常に多様であることを学習者に示している点は非常に評価できる。その反面で、対照させている発話のレジスターに違いがあることは大きな問題である。つまり、パリ及びフランスの変種の例として提示された音

声資料の抜粋は、ニュース番組でアナウンサーが話しているものであり、それと他の変種のインタビュー会話を同列に扱うのはおかしなことである。そのため、「パリのフランス語を話す」ニュース番組のアナウンサーの音声抜粋ではなく、少なくとも他の変種と同様に、パリ出身のフランス語話者のインタビューの抜粋を音声資料に入れるほうが望ましいだろう。また、発音の多様性を教科書で扱う難しさは、教科書の中でその内容に対してそれほどページ数を割けない場合に、説明が簡略化されてしまうこと、またそのような説明によって学習者に誤解を与える可能性が挙げられる。

5. 考察

フランス語の様々な変種が持つ語彙的多様性は教科書で扱われることもあるが、あるフランス語圏の地域で標準的に使用される語彙とインフォーマルな会話で使用される非標準的語彙が一様に扱われてしまうこと、またそこに社会言語学的な解説が加えられないことで、教科書を使用する学習者に何らかの誤解を与えるという問題をどのように解決するのか、という課題が見えてきた。それぞれの変種のどの語彙を学習者に提示するのか、またどのような語彙がその変種で代表的なものなのかということは、非母語話者にとって判断が非常に難しいところである。また、スイスの教科書で見られたようにフランスの規範に影響を受けてしまう場合もある。

しかし、ある変種の母語話者によって作成された教科書では語彙の選定や、その語彙が使用される文脈が適切に反映される可能性も大いにあるだろう。文脈が適切に反映されることによって、学習者はどのような場合にその語彙が使用できるのか理解できるという利点がある。この点については、例えばカナダのケベック州で近年出版された教科書シリーズ *Par ici* (MD 社) は、ケベック・フランス語の母語話者が作成したものであり、ケベック・フランス語に特有な語彙が標準的なものから、非標準的なものまで使用されており、その方法にも工夫が見られる。この教科書シリーズでの語彙使用を分析した近藤 (2022) によれば、非標準的な語彙が使用される場合に、社会言語学的な情報付加の方法が主に 2 つあるという。1 つ目は、語彙の後ろに括弧を入れ、その括弧内に標準的な語彙を示す方法である。例えば、「女性の友人・恋人」を示す *blonde (petite amie)*、「降りる」を示す *débarquer (descendre)*、「信号」を示す *lumière (un feu de circulation)* などの語彙には、そのような方法がとられている。また、2 つ目の方法は、語彙の後ろにアスタリスクを付け、その下にそれがインフォーマルな状況の話し言葉で使用される表現であることを明記するというものである。例えば、Desjardins *et al.* (2016) による教科書 *Par ici : méthode de français B1* (p. 36) には以下のような練習問題が見られる。

3. Parmi les expressions suivantes, indiquez celles qui veulent dire « parler de choses peu importantes ».

- mémérer* jaser* papoter* dialoguer débattre bavarder
 s'entretenir placoter

*Expressions familières utilisées à l'oral dans des situations informelles.

図 5 : Par ici に見られる練習問題 (cf. Desjardins *et al.*, 2016 :36)

以上の練習問題では、「それほど重要ではない事柄について話す」という意味を持つ表現を選択するものであり、アステリスクがついた表現はインフォーマルな会話で用いられるものであることが説明されている。ケベック・フランス語オンライン辞書 Usito によれば、*mémérer* および *jaser* はケベック・フランス語に特有なインフォーマルな会話で用いられる表現である²¹。このように、その変種の話者が異なる発話状況で常に同じように話すわけではなく、発話状況に合わせて適切に語彙を選択している可能性があるということを学習者に明示することも一つの方法である。

発音教本の分析からは、限られたページ数で発音の多様性を扱うことの難しさが考察された。音声資料の収集の難しさは課題であるが、同程度の年齢で社会的プロフィールが均質な話者に協力してもらうことが理想的だろう。また、教科書作成者がフランス語の発音の多様性を教科書の中で扱うことを選択したならば、言語学的な解説を提供することは重要である。なぜなら、それぞれの変種に何かしらの「訛り」があることを気づかせることを超えて、どのように変種間で発音が異なっているのかという点に学習者に着目させることができるからである。学習者自身が普段聞き慣れているフランス語の変種と他の変種がどのように違っているのかを理解できれば、聞き慣れていない変種の発音の理解を促す助けになる。また、「訛り」というステレオタイプ的な認識から脱却し、世界中で話されるフランス語がいかに多様であるかを体感できる機会を提供できるだろう。

発音教本で具体的に発音の多様性を示すのであれば、参照フランス語²²の音体系に見られる/a/と/ɑ/の対立、半狭・半広母音の対立 (/e/-/ɛ/, /ø/-/œ/, /o/-/ɔ/)、鼻母音の数(特に/ɑ̃/と/ɛ̃/の対立)が地域変種によってどのように異なるのかを聞き取らせる、また子音に関しては/r/の発音の違いを聞かせるということも可能だろう²³。ただし、解説が必要以

²¹ *papoter* はケベック・フランス語に特有の語彙とは限らないことはこの練習問題からはわからない。また、*placoter* は実際には「それほど重要ではない事柄について話す」といった意味を持つ非標準的なケベック・フランス語の語彙であるにもかかわらず、アステリスクがついていないのは誤りである。

²² 参照フランス語(*le français de référence*)とは Morin (2000)が名付けた用語で、Laks(2002 :7)は「伝統的な記述と分析、音韻論者らの直感と考察、さらに最近の研究や特殊な用法の分析、それらを全て集めて形成された1つの価値観」であると説明している。この参照フランス語の音体系は日本で出版された教科書によく見られるものである。

²³ これらの音はフランスの変種では、/a/と/ɑ/、半狭・半広母音の対立、鼻母音/ɑ̃/と/ɛ̃/の対立は特に若い世代の話者では中和が見られ、/r/の発音は口蓋垂摩擦音の[ʀ]に固定している。フランス以外で

上に詳細なものになると、学習者の負担になるため、その場合には巻末資料などで副次的に提供することも可能である。また、教師側に提供する教授用資料には、より専門的な情報を与える必要がある。

6. おわりに

本稿では、様々な国・地域で出版されたフランス語教科書における地域変種の扱いについて、先行研究で指摘されてきたことを整理した。フランス語の様々な変種が持つ語彙的多様性は教科書で扱われることもあるが、あるフランス語圏の地域で標準的に使用される語彙とインフォーマルな会話で使用される非標準的語彙が一様に扱われてしまうこと、またそこに社会言語学的な解説が加えられないことで、教科書を使用する学習者に何らかの誤解を与える可能性があることが Duchemin (2017)と Chaliier (2021)の研究から明らかになったと言える。それぞれの変種の、どの語彙を学習者に提示するのか、またどのような語彙がその変種で代表的なものなのかということは、非母語話者にとって判断が非常に難しいところであるが、各変種の母語話者が作成した教科書における語彙選択は何らかの指標になるだろう。また、発音教本の分析からは、発音の多様性を限られたページ数の中で扱うことの難しさが観察されたが、「訛り」に対して言語学的な解説を提供することは有意義である。言語変異に関わる能力が望まれるのが特に B2 レベルからであったとしても、学習者の負担にならない程度で、言語変異に対する関心を持つ機会を提供することは早期からでも可能であろう。

参考文献

- ANDREASSEN, H., MAÎTRE, R. & RACINE, I. (2021). Le français en Suisse : éléments de synthèse. In Detey, S., Durand, J., Laks, B. & Lyche, C. (éds), *Les variétés du français parlé dans l'espace francophone*. Paris : Ophrys, 213-231.
- CHALIER, M. (2021). Variation et pluralité des normes dans l'enseignement du français langue étrangère : une analyse de deux manuels scolaires allemands. In Elissa Pustka (éd). *La prononciation du français langue étrangère*. Tübingen : Editions Narr, 365-403.
- CONSEIL DE L'EUROPE (2001). *Cadre européen commun de référence pour les langues : apprendre, enseigner, évaluer*. Paris : Conseil de l'Europe.
- COQUILLON, Q. & DURAND, J. (2010). Le français méridional : éléments de synthèse. In Detey, S., Durand, J., Laks, B. & Lyche, C. (éds), *Les variétés du français parlé dans l'espace francophone*. Paris : Ophrys, 185-197.
- DETEY, S. (2017). La variation dans l'enseignement du français parlé en FLE : des recherches linguistiques sur la francophonie aux questionnements didactiques sur l'authenticité. In A.-C. Jeng, B. Montoneri & M.-J Maitre (éds), *Échanges culturels aujourd'hui : langue et littérature*.

は変種によって母音の対立が保持される場合や、[ɥ]以外の子音で発音される場合もあり、一様ではない。

New Taipei City : Tamkang University Press, 93-114.

- DESJARDINS, N., PROULX, D. & SAUVÉ, R. (2016). *Par ici : méthode de français B1*. Montréal : Éditions MD.
- DUCHEMIN, M. (2017). Les représentations associées aux français nationaux, aux espaces géographiques et aux locuteurs dans les manuels de français langue étrangère et de français langue seconde: étude comparée entre la France et le Québec, *Revue canadienne de linguistique appliquée*, 20, 51-70.
- EMBARKI, M., ABOU HAIDAR, L., ZEROUAL, C., M. & NABOULSI, R. (2016). Les arabophones. In Detey, S., Racine, I. Kawaguchi, Y. & Eychenne, J. (éds), *La prononciation du français dans le monde*. Paris : CLÉ International, 97-102.
- KONDO, N. (2021). La prononciation dans les manuels de FLE: entre norme d'orthoépistes et usage réel. In Pustka, E. (éd). *La prononciation du français langue étrangère*. Tübingen: Editions Narr, 405-428.
- LAFINE, J. & THOMAS, A. (2020). La suisse romande dans les manuels de FLE à l'école obligatoire en Suisse alémanique, *Babylonia*, 1, 34-43.
- LAKS, B. (2002). Description de l'oral et variation : la phonologie et la norme, *L'information grammaticale*, 94, 5-10.
- MORIN, Y-C. (2000). Le français de référence et les normes de prononciation, *Cahiers de l'Institut de linguistique de Louvain*, 26, 1, 91-135.
- REINKE, K. & OSTIGUY, L. (2016). *Le français québécois d'aujourd'hui*. Berlin/Boston : Walter de Gruyter.
- REUTNER, U. (2017). Alsace, In Reutner, U. (éd), *Manuel des francophonies*. Berlin/Boston : Walter de Gruyter.
- SURCOUF, C. & GIROUD, A. (2016). À quelle langue accède l'apprenant ? Examen critique du traitement de l'oral dans les premières leçons de manuels de français langue étrangère pour débutants, *Linguistik Online*, 78, 4, <https://doi.org/10.13092/lo.78.2947>. (最終閲覧日 : 11/27/2023)
- VALDMAN, A. (2000). Comment gérer la variation dans l'enseignement du français langue étrangère aux États-Unis, *The French Review*, 73, 4, 648-666.

アヌカン・ローラン, 近藤野里, 岡崎敏, 竹本江梨 2018 『パラレル2』 白水社.

小松祐子, デルメール・ジル 2009 『フランコフォニーへの旅』 駿河台出版社.

近藤野里 2019 「ケベック州で出版されたフランス語教科書にみられる社会言語学的変異の反映の方法」『外国語教育研究』 22号, 2-21.

近藤野里 2019 「ケベックのフランス語教科書に反映される語彙的および統語的特徴」『ケベック研究』 11号, 65-80.

近藤野里 2022 「ケベック州で出版されたフランス語教科書に見られるケベック・フランス語の語彙について」, 2022年10月15日, 日本ケベック学会 2022年度全国大会での発表資料.

近藤野里 2023 「日本語を母語とするフランス語学習者における言語変異の習得 縦断的発話データに基づいた分析」『ふらんぼー』 48号, 122-137.

発音教本

- KAMOUN, C. & RIPAUD, D. (2017). *Phonétique essentielle du français B1-B2*. Paris : Didier.